The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マルロー「王道」における身体性
Author(s)	上江洲, 律子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2005, 39, p. 77-92
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10801
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マルロー『王道』における身体性

上 江 洲 律 子

はじめに

1913年、ジャック・リヴィエールは、自ら創刊から携わる雑誌 *NRF* において、象徴主義（特に詩）は、広大な心理主義の伝統を有するフランスで特に発展を遂げたが、「老いを迎えて久しく」« il [=le symbolisme] a eu une vieillesse assez longue »(p. 8)、既にその役目を終えたと述べ、それに代わる新しい潮流として冒険小説を掲げた[1)]。曰く、象徴主義作品は、語られる言葉と語られない言葉、凝縮された言葉とその行間から湧き上がるものであり、読者は暗黙裡に作者との共犯関係を強いられ、作者の感情を通して自己の閉じられた内面世界の発見に誘われる。それに対し、既にその胎動が感じられる冒険小説は、全てが開かれたカードのように顕在的に表現され、読者は推測することなく即座に現実に触れることができる。すなわち、作品内部に立ち上がる１つの現実的世界が問題であり、読者は自らの内面から解放され、作品が提示する未知の世界との出会いへと導かれるのである。そこには、新しい文学の希求と同時に、自分を取り巻く世界への関心、言わば、その世界の再認識や発見への志向が現れていると言えるだろう。アンドレ・マルロー（1901-1976）は、1920年に発表した論文「立体派詩の起源について」において、ジャック・リヴィエールに呼応するように、象徴主義を「老いた文学運動」« le symbolisme, devenu un *mouvement* littéraire sénile » (p. 89) と見なし、その凋落の渦から抜け出

した新たな美学として、マックス・ジャコブを始めとする詩人達の作品を取り上げて論じた[2)]。そして、その翌年、一見自家撞着的ではあるが、象徴主義を否定する寓話的な冒険物語、彼の処女作となる『紙の月』を、師と仰ぐマックス・ジャコブに献じる形で発表する[3)]。こうした行動から、マルローの同時代文学の流れに対する眼差しと、新しい文学の実践への意志を窺うことができるだろう。

ところで、前述のジャック・リヴィエールの宣言に従うように、雑誌 *NRF* 及びその出版部門となるガリマール社は、海外の冒険小説の紹介に取り組み、1920年から1930年代にかけて、*NRF*－ガリマールの支柱とも言うべきアンドレ・ジッド指揮下に、ジョゼフ・コンラッドの作品群の翻訳出版が行われた[4)]。この文学活動を背景に、1930年、マルローの『王道』は、まさに「冒険小説」と銘打ってグラッセ社から出版される[5)]。勿論、この作品が彼の実際の冒険と呼ぶべき体験を踏まえて書かれたことは周知の事実だが[6)]、出版に先立つ1928年から彼自身ガリマール社の原稿審査委員会に入るなど、雑誌 *NRF* 及びガリマール社を中心に生み出される文学場の只中にいたこと[7)]、『王道』にジョゼフ・コンラッド作品との類似が確かに見られることなどから[8)]、既に『紙の月』でその萌芽を確認したように、マルローの同時代の新しい文学潮流への対応は明白と言えよう。それらのことを考慮すると、彼が作品内に描く世界を、単なる現実体験をめぐる物語としてではなく、ジャック・リヴィエールの示唆した、現実世界の再認識と発見、さらに、その表象の問題として考察することは意味のあることだろう[9)]。本論文では、主人公達の描写に現れる特徴に着目し、そこに反映される、マルローによって見出された現実の新しい諸相の一端を明らかにしたい。

1．石を叩くという行動

『王道』は、西欧人である２人の主人公、クロードとペルカンが、インドシナ半島に広がる密林で、クメール美術の発掘及び友人の救出を行う物語である。最初に考察するのは、密林に分け入った主人公達が、そこに残された廃墟の塔の壁に市場価値の高い美術品を発見し、その収奪に取り組む場面である。美術品の獲得は、彼らの冒険の主要な目的の１つであり、その達成に至る場面は、語られる物語の中心の１つと言えるだろう。その場面において、行動する主人公達、クロードとペルカンの描写には明白な類似を見ることができる。

主人公達は、問題となる石の壁に対して、道具や方法を代えながら取り組み、ついに成功に至る。その獲得の過程において、クロードの内面は「激しい怒りで」« De rage » (*VR*, p. 428) と示され、ペルカンも「怒り狂った」« furieux » (*VR*, p. 429) と形容されるように、共に強い怒りの感情を抱きながら、切り離すことが出来ない石をハンマーで叩き続ける二人の姿が描かれる。彼らをそうした行動に駆り立てるものとして明示されているのが、クロードの場合、自分達の行為が「失敗」« échec » (*VR*, p. 430) に帰してしまうという思いであり、ペルカンに関しては、自分の思いつきを「ばかげたこと」« absurdité » (*VR*, p. 429) と見なす意識である。いずれにしても、自らの行為が何の結果も生み出さず、無意味なものに堕するのではないかという危惧あるいは認識が、彼らの行動の背景にあることに留意しながら、それぞれの描写について考えていく必要があるだろう。

> Claude frappait presque sans conscience, comme marche un homme perdu dans un désert. Sa pensée en miettes, effondrée comme le temple, ne tressaillait plus que de l'exaltation de compter les coups:

un de plus, toujours un de plus... Désagrégation de la forêt, du temple, de tout... Un mur de prison, et comme des coups de lime, ces coups de marteau, constants, constants. (*VR*, p. 429)

石の壁を叩くクロードの姿は、下線で示したように、動詞の半過去表現や、「さらにもう一度、常に変わらずもう一度・・・」、「絶え間なく、絶え間なく、こうしてハンマーで叩くこと」という表現によって、その行動の反復性が強調されていることが分かる。そして、同時に着目したいのが、二重線で示した「ほとんど意識のない状態で」と「粉々になった彼の思考は、寺院のように崩れ果て」という、意識や思考に関する否定的な表現だ。行動の主体であるクロードの認識力が低下し、思考の働きそのものが失われていることを見て取ることができるだろう。

こうしたクロードの状態は、さらに、「弱められた知性」« son intelligence diluée » と「奥地の麻痺状態によって解放された本能」« L'instinct, libéré par l'engourdissement de la brousse » の対立状態として描かれる（*VR*, p. 430)。石を叩くという彼の行動を支えているものが、本能の方であることが明確に述べられているのである。クロードにおいて、単に、知性に関わる機能が低下しているだけではなく、その一方で、本能に関わる機能が高まっていることを押さえておかなければならない。

また、石を叩くクロードを描いた引用の点線部「叩いている音を数える興奮」という表現は、単純で反復される行動、それ自体に、クロードが性的な刺激を感じていることを示唆してもいよう。つまり、石を叩き続けるという行動を継続している間に、意識や思考、知性といった精神の機能が弱まっていくのに対し、本能に関わる身体の働きが活性化し、それに連動するように、行動そのものに対する性的な反応が喚起されているのである。それらの特徴はペルカンの描写にも現れている。

Des coups répétés, de la perte de sa lucidité, un plaisir érotique montait, comme de tout combat lent; ces coups, de nouveau, l'attachaient à la pierre... (*VR*, p. 431)

下線で示した「繰り返し叩くこと」や「もう一度、こうして叩いていること」という表現は、クロードの場合と同様、ペルカンの石を叩くという行動が反復されていることを示している。そして、二重線で示したように、ペルカンも、反復される行動の中で「明晰さを喪失」した状態として描かれている。これは、クロードと同じく、知性の働きが停止しているのであり、それを司る精神の機能が低下していることが窺える。クロードとペルカンの描写に見られるこうした特徴は、石を叩くという、本来美術品を獲得するために行われている行動が、その目的が達成されないまま継続されるうちに、その目的自体が失われ、一種の身体運動と言うべきものに変貌していることの現れと言えよう。また、点線で示した部分から、クロードの描写においては、喚起されるに留まっていた性的な要素が、ペルカンの描写では、端的に「性的な喜び」と表現されていることが分かる。石を叩くという反復される行動は、その無意味さが意識される局面で、精神の働きの後退と同時に、身体の働きの強化と関連し、さらに性的な要素とつながるものとして描かれているのである。

ところで、『王道』の冒頭、性を主題としたペルカンの言葉の中で、「恋愛」といった性の精神的な面は否定され、「器官」としての身体的な面が強調されている[10]。主人公達の行動に見られる性的な要素も、人間の身体的特性の1つとして考えることができるだろう[11]。物語の中心とも言える場面において、主人公達に共通して現れるこうした特徴は、作品の主題に関わると見なすことができる。その他の場面における彼らの描写を分析しながら、そのことが示す意味について考察していきたい。

2．歩くという行動

美術品の獲得に成功した一行は、次に、ペルカンの友人グラボに会うために、密林に住む部族、モイ族の村を訪れる。そこで、主人公達は、グラボがその村人の奴隷として暮らしていることに気付き、彼を救い出そうと試みた結果、村人達と対立し、「(獲物のごとく) 包囲された」« Traqués » (*VR*, p. 463) という言葉が端的に示すように、村の小屋の１つに追い詰められることになる。しかし、その際に、ペルカンが取った行動が契機となり、主人公達と村人達、両者の敵対的な緊張は緩和され、その後の交渉の結果、ペルカンとクロードはグラボと共に無事にその村を離れることに成功する。先に述べたように、友人の救出は『王道』のもう１つの主要な冒険であり、主人公達とモイ族の関係が変化する場面は、友人救出の物語の中心を成していると言えるだろう。その変化をもたらす、言い換えると、冒険の成功を促すペルカンの行動にも、美術品の獲得の際に主人公達の行動に共通して現れた特徴を見ることができる。その特徴を順に確認していきたい。

クロードやグラボと共に逃げ込んだ小屋が、結局、村人達に包囲され、膠着状態に陥ったペルカンは、「明確な思考というものが全て消え失せていた」« Toute pensée précise était anéantie » (*VR*, p. 466) という表現に見られるように、思考という精神に関わる機能が極度に低下した状態として描かれている。それに続いて示されるのは、彼の歯がかちかちと音をたてる様子である « un cliquètement inexplicable: ses dents qui claquaient » (*VR*, p. 466)。そこに付与された「説明できない」という語から、ペルカンにおいて、彼自身の意思とは切り離された身体反応、一種生理的とも言える反応が起こっていることを見て取ることができる。精神の働きが弱まり、身体が自立的に働き始めていると言えよう。そして、その歯が鳴る音が合図であったかのように、ペルカンは小屋から外へ出て、彼らを包囲してい

る村人達の方へと歩き始めることになるのである。ペルカンが歩く姿は、「硬直した脚で踏み出す一歩一歩が、彼の腰や首の中で鳴り響いていた」« Chaque pas des jambes raidies retentissait dans ses reins et son cou »（*VR*, p. 467）と描写されている。「一歩一歩」という言葉や「鳴り響いていた」という動詞の半過去表現によって、その歩くという単純な行動自体に、ハンマーで石を叩くような反復的な行動の特徴が与えられていることが分かるだろう。ここで、主人公達の行動に伴う反復音が、密林に鳴り渡るハンマーの音から、ペルカンの身体の内部に響く歩行音というように、身体の外部から内部へと変化していることも押さえておきたい。

ところで、歩き出す前のペルカンの内面では、思考力の低下と同時に、彼自身が陥っている、その追い詰められた状況や、友人の姿が暗示する彼の奴隷としての将来に対する強い反発が沸き起こっている。「失墜に対する戦い」« La lutte contre la déchéance »（*VR*, p. 466）と称されるその反応が、「性的な激高」« une fureur sexuelle »（*VR*, p. 466）と比喩されていることに注意したい。この特徴は、歩き出したペルカンの描写の中に、直接的な形で見ることができる。彼が歩く様子は、「性的に身を投げ出して」« Jeté sexuellement »（*VR*, p. 469）と表現されているのである。主人公の描写におけるこうした特徴、精神の働きの低下が引き金の役割を果たし、行動に性的な反応が喚起されるという特徴は、先程考察した美術品獲得の場面における主人公達の行動の特徴と一致している。また、上記の引用に見られるように、モイ族へ向かって歩き出すペルカンを取り巻く状況は「失墜（およびそれを強制する状況）」と名付けられている。それが「心を奪う狂気」« une folie fascinante »（*VR*, p. 466）と言葉を変えて示されることから、この場面においても、石を叩く行動の場合と同様、主人公が行動を起こす背景は、非論理的で狂った状況、彼らの存在をも無意味化する、ばかげた状況として設定されていることが分かる。

以上のように、『王道』で語られる２つの冒険、その中心的な場面において、主人公達の行動には共通した特徴を見出すことができる。主人公達は、彼らが「ばかげた」« absurde » と見なす状況に直面したところで、単純で反復的な行動をとる。その行動と前後して、彼らの精神の機能は後退し、その一方で、身体に関わる機能が強まり、それに触発されるように、身体的な特性の１つである性的な高揚感が生まれている。そうした主人公達の姿に、特定の状況下における人間の反応の精神から身体への移行を見ることができるだろう。そして、その身体性は、物語の最後に語られるペルカンの描写に強く打ち出されるのである。

３．脈打つ身体

モイ族の村で村人達に向かって歩いている際に転倒し、膝に負った傷が原因で、ペルカンは死の宣告を受けることになる。『王道』は、負傷し、死に瀕しながらも旅を続けるペルカンの姿を描きながら最後のページを迎える。主人公達の描写について考える上で、こうした物語の最後に焦点化されるペルカンの姿を無視することは出来ない。彼の描写の特徴をここで確認しておこう。

> [...] un élancement aigu envahissait le genou: il montait à intervalles réguliers, d'un mouvement mou et lancinant, <u>lié au battement du sang qui des tempes retentissait dans sa tête</u>. (*VR*, p. 470)

ペルカンが負った膝の傷の痛みは、「脈の動きと結びつき、血が脈打つ音がこめかみから生じ、頭の中で鳴り響いていた」と描かれている。まさに、傷に対する身体の生理的な反応である。この場面では、これまでの主人公達の行動において特徴的に見られた、精神から身体への移行はもはや語ら

れず、問題となるのは身体そのもの、人間の意思から切り離された身体の反応となる。また、ペルカンのその反応は「彼の血管のうずくようなハンマーの音」« le martèlement lancinant de ses veines » (*VR*, p. 504) と言葉を変えて表現されている。この「ハンマーの音」« le martèlement » という名詞と、先に挙げた引用の「鳴り響いていた」« retentissait » という動詞は、前者が、廃墟の石の壁を叩くクロードとペルカンの描写を、後者が、敵対する対象に向かって一歩一歩進んでいくペルカンの描写を彷彿させる。物語の主要な2つの冒険を通して、主人公達の行動が生み出してきた反復音のイメージが、物語の最後において、ペルカンの生理的反応と呼ぶべき身体の反応に重ね合わされるように現れていると言っても過言ではない。こだまのように響きあう身体のイメージ、そこに主人公達の行動を通して表象される物語の主題の連鎖と収束を見ることができるだろう。

ところで、ペルカンの体内で響く脈の動きは、「深い喜び」« une joie profonde » (*VR*, p. 504) と結び付けられている。そこに性的な意味付けは見受けられないが、身体内部で反復される血液の動きに合わせて、喜びの感情が湧き上がっていることから、石を叩くという行動や歩くという行動の場合と同様の特徴を指摘することができる。そして、負傷したペルカンを取り巻く状況は、「普遍的な狂気」« la folie universelle » (*VR*, p. 504) と比喩されると同時に、端的に「不条理」« absurdité » (*VR*, p. 503) という言葉で表現されている。つまり、この場面においても、主人公の身体の反復的な反応が引き起こされる背景は、あらゆる意味付けを無効化する「不条理」として特徴付けられているのだ。

物語の冒頭部、主人公達がインドシナの密林に到着する以前、船上でのクロードの描写にも、同じく「こめかみに血が脈打つ」« le battement du sang à ses tempes » (*VR*, p. 395) という描写が見られた。クロードにその反応を引き起こしているものは、「死の厳しい支配」« L'austère domination

dont il [=Claude] venait de parler à Perken, celle de la mort » (*VR*, p. 394) と示されているように、観念的なものだった。これは、ペルカンに見られる反応が、膝の傷という身体的なものから生じていることと明確な対照を成していると言えるだろう。「血が脈打つ」という、同じ身体的な反応を引き起こす原因となっているものが、物語の冒頭部分では観念的なものであり、物語の最後では身体的なものへと変化しているのである。それもまた、物語を通して、表象の中心的主題が身体的なものへと移り変わっていることを示唆するものだろう。

『王道』の主人公達の描写を通して明らかにされるのは、不条理な状況に直面した人間の姿なのである。その不条理は、死に瀕した人間だけではなく、「人間であること」そのもののもつ性質であるとも述べられている « être un homme, plus absurde encore qu'être un mourant » (*VR*, p. 502)。つまり、死を運命付けられた生という条件を有する人間の不条理、それに対峙して、生き続けていく人間の対応として、マルローが掲げた1つの答えが身体であると言うことができよう。後に、アルベール・カミュは、『シーシュポスの神話』(1942) において、身体と精神が示す判断の同等性を指摘した後で、全てが失われた状況下、言わば、生きることへの不条理が顕在化した状況において、精神ではなく、身体の方が発揮する力、生の方へ人間を繋ぎとめる身体の力を示唆した[12]。不条理という主題については勿論、『シーシュポスの神話』にマルローからの影響が見られることは既に知られているが[13]、『王道』において示された身体の持つ可能性が、人間の1つの在り方として、マルローに続く世代に属するカミュの眼差しにおいても、確かに息づいていると言えるのではないだろうか。

おわりに

1932年、雑誌 *NRF* に掲載した『チャタレイ夫人の恋人』の書評の中で、

マルローは、D. H. ロレンスについて、心理主義という、登場人物の個別性を土台とした文学を否定し、人間に共通の要素である性を主題とした新しい文学の創造に取り組んでいると述べている[14]。つまり、マルローは、心理主義の否定は勿論、人間に共通する要素として身体性を取り上げ、それを通して人間を描く試みに新しさを見出しているのである。この書評の言葉が、先に取り上げた『王道』の冒頭におけるペルカンの言葉と重なることが示唆するように[15]、クロードとペルカン、2人の主人公達の姿を、身体運動や生理的反応を通して描いているマルローの手法は、彼がD. H. ロレンスの作品に指摘した新しさと一致する。ジャン＝クロード・ララは、マルローの文学活動における書評（主に序文）の果たす役割について指摘しているが[16]、『チャタレイ夫人の恋人』に関する書評は、『王道』においてマルローが試みた新しい文学実践の一端を解く鍵を与えているのだ。

『王道』の舞台となっている東洋に関し、マルローは、1926年に発表した論文において、西欧人である自らの姿を見出す場であると述べ[17]、1927年、アンリ・マシスの『西欧の擁護』についての書評では、東洋を「可能性」の場であると評した[18]。つまり、彼にとって東洋は、自らを映す新しい鏡という可能性を秘めた場ということになる。1922年、彼の最初の美術論となる、展覧会のカタログの序文において、「我々は比較によってしか感じることは出来ない」と述べたマルローにとっては、自明の認識の方法と言えるだろう[19]。では、東洋において見出される西欧人の姿とはどのようなものか？『西欧の誘惑』(1926) でマルローは、中国人のリン氏の言葉として、西欧における精神の過大評価を指摘している[20]。このリン氏の批判は、『王道』で、ペルカンの描写に明確に打ち出される「精神＝自分」と「身体＝他者」という二元論[21]や、クロードとペルカンの描写に見られる精神から身体への移行を考慮すると、作品を越えて『王道』の主題を解く手がかりとしての重みを増す。すなわち、『王道』では、『西欧の誘惑』のリン

氏の批判に応えるように、認識する主体として登場する西欧人の主人公達が、東洋という場において、自らの存在の中心的役割を果たしている精神の座を身体に譲り渡す過程が示されているのである。つまり、インドシナ半島という東洋の密林の中、主人公達の描写において前景に踊り出る身体性は、西欧において精神の影に追いやられてきた身体の復権であり、身体の再評価を意味しているのだ。

以上のことから、『王道』において、マルローは、身体という人間の一側面に光を当て、１つの価値として表現することで、心理主義を否定する新しい文学を試みると同時に、西欧の人間にとって「新しい人間の概念」を提示していると言えるだろう。

テキスト

André Malraux, *La Voie royale* (abrégé, *VR*), in *Œuvres complètes*, t.I, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1989 (1re éd., Grasset, 1930). 各引用後の括弧内に出典の省略記号と頁数を示す。また、翻訳及び引用の下線は論者による。和訳は滝田文彦訳を参考に論者が訳出した。

注

1) Jacques Rivière, *Le Roman d'aventure*, Editions des Syrtes, 2000. 初出は *La Nouvelle revue française*, nos53-54-55, mai à juillet 1913。
2) André Malraux, « Des Origines de la poésie cubiste », in *André Malraux*, Editions de l'Herne, « Cahiers de l'Herne », 1982, pp. 89-92. 初出は *La Connaissance*, n°1, janvier, 1920。引用内のイタリック体による強調はマルローによる。
3) André Malraux, *Lunes en papier*, in *Œuvres complètes*, t.I, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1989 (1re éd., Editions de la Galerie Simon, 1921). 拙論「マルロー『紙の月』における « farfelu » の表象」『フランス文学論集』第37号、九州フランス文学会、2002年、25-36頁を参照。
4) フランスにおけるこの文学活動に関しては以下を参照：Christiane Moatti, « Malraux et Conrad: un certain roman d'aventure », in *Le Livre dans la vie et l'œuvre d'André Malraux*, Klincksieck, « Actes

et colloques », n°26, 1988, p. 103；ピエール・アスリーヌ『ガストン・ガリマール ── フランス出版の半世紀』天野恒雄訳、みすず書房、1986年、81-82頁。

5) 『王道』の出版広告は以下の通り：*Album Malraux*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1986, p. 110 : « un roman d'aventures par l'auteur des *Conquérants* »。

6) マルローのアンコール探検に関しては以下の著作に詳しい：Clara Malraux, *Nos vingt ans*, Grasset, 1986, pp. 94-157; Walter G. Langlois, *André Malraux. L'Aventure indochinoise*, traduit de l'américain par Jean-René Major, Mercure de France, 1967, pp. 1-27。

7) この時期のマルローの動向に関しては以下を参照：Curtis Cate, *Malraux*, traduit de l'anglais par Marie-Alyx Revellat, Flammarion, 1994, pp. 166-196；ピエール・アスリーヌ、前掲書、182-184頁。

8) マルロー『王道』とジョゼフ・コンラッド『闇の奥』(1899年、1902年再版、フランスでの翻訳版は1924年から1925年) の類似については以下の論文に詳しい：Christiane Moatti, *art.cit.*, pp. 97-113。

9) 後に雑誌 *NRF* の編集長となるピエール・ドリュー・ラ・ロシェルは、書評において、『王道』に見られる現地報告的な印象を指摘する一方で、マルロー自身の思考体系が垣間見られると述べ、彼を「新しい人間」と称している：Pierre Drieu La Rochelle, « Malraux, l'homme nouveau », in *Les Critiques de notre temps et Malraux*, par Pol Gaillard, Garnier Frères, 1970, pp. 48-50。初出は *La Nouvelle revue française*, décembre 1930。

10) « Les hommes jeunes comprennent mal... comment dites-vous ?... l'érotisme. Jusqu'à la quarantaine, on se trompe, on ne sait pas se délivrer de l'amour: un homme qui pense, non à une femme comme au complément d'un sexe, mais au sexe comme au complément d'une femme, est mûr pour l'amour: tant pis pour lui. » (*VR*, p. 371)

11) クロード・モーリャックは、マルロー作品におけるエロティシズムを論じた著作において、『侮蔑の時代』(1935) や『天使との闘い』(1943) の例を挙げながら、危機的状況下にある主人公達の行動に性的特徴が見られることと、その身体性について指摘している。Claude Mauriac, *Malraux ou le mal du héros*, Grasset, 1946, p. 75: « Bien plus, Malraux décèle entre l'amour et un certain paroxysme de l'action une similitude qui se traduit par les mêmes conséquences physiques. »

12) Albert Camus, *Le Mythe de Sisyphe*, in *Essais*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1965, p. 102: « Le jugement du corps vaut bien celui de l'esprit et le corps recule devant l'anéantissement. Nous prenons l'habitude de vivre avant d'acquérir celle de penser. »

13) Louis Faucon, « Commentaires », *ibid.*, p. 1410. アルベール・カミュ『カミュの手帖 1935-1959（全）』大久保敏彦訳、新潮社、1992年、30及び34-35頁に『シーシュポスの神話』に関わる記述と同時にマルローについての言及が見られる。

14) André Malraux, « D.H. Lawrence et l'érotisme, à propos de *L'Amant de Lady Chatterley* », in *La Nouvelle revue française*, janvier 1932: « A ses yeux [de D.H. Lawrence], ce n'est pas par la conscience de ce qu'il a de particulier que l'individu s'atteint, c'est par la conscience la plus forte de ce qu'il a de commun avec tant d'autres : son sexe » (p. 137); « Il s'agit de détruire notre mythe de l'amour, et de créer un nouveau mythe de la sexualité: de faire de l'érotisme une *valeur.* » (p. 139) 引用内のイタリック体の強調はマルローによる。

15) 注10)を参照。

16) Jean-Claude Larrat, « Malraux préfacier », in *La Revue des Lettres modernes*, Minard, « série André Malraux », n°11, 2001, p. 100: « Nous nous proposons de montrer, pour terminer, que Malraux n'a pas considéré les œuvres qu'il préfaçait comme de simples prétextes à développer des idées forgées par ailleurs, mais qu'il a su choisir des œuvres qui représentaient la vraie modernité de son époque pour mettre en évidence la modernité de sa propre vision du monde. »『チャタレイ夫人の恋人』の場合、雑誌 *NRF* に掲載された書評とフランス語版の序文はわずかな変更を除いてほぼ同文である。André Malraux, « Préface », à *L'Amant de Lady Chatterley* de D.H. Lawrence, traduit de l'anglais par F. Roger-Cornaz, Gallimard, « Folio », 1972, pp. 7-12 (1re éd., Gallimard, 1932).

17) André Malraux, « André Malraux et l'Orient », in *Œuvres complètes*, t.I, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1989, p. 114: « L'objet de la recherche de la jeunesse occidentale est une notion nouvelle de l'homme. L'Asie peut-elle nous apporter quelque enseignement ? Je ne le crois pas. Plutôt une découverte particulière de ce que nous sommes. » 初出は *Les Nouvelles littéraires*, 31 juillet 1926。

18) André Malraux, « *Défense de l'Occident*, par Henri Massis », in *La Nouvelle revue française*, juin 1927, p. 817: « L'Asie, c'est un certain nombre de possibilités particulières... »

19) André Malraux, « La Peinture de Galanis », in *Ecrits sur l'art*, t.I (*Œuvres complètes*, t.IV), Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2004, p. 1170: « Nous ne pouvons sentir que par comparaison. » 初出は *Exposition D. Galanis*, Editions de la Galerie de la Licorne, 1922, pp. 3-10 (non numérotées)。

20) André Malraux, *La Tentation de l'Occident*, in *Œuvres complètes*, t.I, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1989 (1re éd., Grasset, 1926), p.67: « Ils [=Les Européens] ont inventé le diable, j'en rends grâce à leur imagination. Mais depuis que le diable est mort, ils me semblent en proie à une plus haute divinité du désordre: l'esprit. »

21) ペルカンの描写に見られる「精神＝自分」と「身体＝他者」という二元論に関しては以下の描写を参照：« Il [=Perken] croyait à la menace plus qu'à la mort: à la fois enchaîné à sa chair et séparé d'elle, comme ces hommes que l'on noyait après les avoir liés à des cadavres. » (*VR*, p. 484)

(大学院博士課程単位修得退学)

SUMMARY

Le corps dans *La Voie royale* de Malraux

Ritsuko UEZU

Dans *La Voie royale* (1930) d'André Malraux (1901-76), nous pouvons relever des traits communs dans la description des deux héros, Claude et Perken, menacés d'échec ou de mort au cours de leurs aventures, dans des situations que l'auteur qualifie lui-même d'absurdes: il s'agit d'opérations corporelles simples et répétitives ou de phénomènes physiologiques incessants, comme « frapper la pierre », « marcher » et « se faire battre le sang à l'intérieur du corps »; de l'affaiblissement des fonctions de l'esprit; et de l'exaltation sexuelle surgissant du corps. Le corps est donc mis au premier plan lors d'une crise qui évoque ou qui concerne l'absurdité de l'être humain, alors que l'esprit prend du recul.

Comme il le dira plus tard dans la note intitulée « D.H.Lawrence et l'érotisme » (1932), Malraux, en décrivant les actions communes à la condition humaine, pose l'aspect physique comme aspect universel, en évitant l'analyse psychologique de l'individu fréquemment rencontrée dans les romans contemporains, ce qui souligne ici sa recherche d'une littérature nouvelle comme roman d'aventure. Or, selon son article « André Malraux et l'Orient » (1926), l'Orient, espace de ce roman, renvoie les héros occidentaux à leur propre image. L'esprit, que Malraux critique comme surestimé en Europe dans *La Tentation de l'Occident* (1926), se voit substituer le physique comme première fonction humaine, et cela s'inscrit aussi dans la recherche par Malraux d'une « notion nouvelle de l'homme ».

キーワード：マルロー，身体性，不条理，冒険小説，東洋観